『トクシマ・アンツァイガー』

第 24 号　　徳島　1915 年 9 月 12 日

最近数週間の戦況概観

さまざまな戦線の推移について最近とりあえず概観を提示したのは、7 月終わりに出た 13 号だった。

8 月のあいだも、重点はやはり東部戦線にあった。そこでわれわれの諸部隊は予想外の戦果をあげ、ガリツィアにおける大勝利は世界史上これまで記されたことがないほど十分に利用された。ポーランドにおける大規模な攻撃により、わが軍はすでに 8 月のはじめにワルシャワとイワンゴロドを占領した。その後すぐ、ナレフ要塞群も突撃によって奪取され、これによってヴァイクセル川［ヴィスワ川］の全戦線、あの難攻不落と思われていたロシアの陣地はわが手に落ちた。ノヴォ・ゲオルギエフスク、つまりブク・ナレフ川がヴァイクセル川に注ぐ合流点にある強力な要塞は、その後しばらく持ちこたえたが、それによって上の事実は何も変わらない。

しかし、この大勝利ののちに命令されたことは、当然与えられてよい休暇を楽しめということではなく、さらにたゆまず、敵に集結や戦力の再編成や新しい陣地構築の暇を与えるな、ということだった。ロシアの最高指揮官は、ヴァイクセル戦線が崩壊したとき、麾下諸部隊がはるかに強力な第二戦線であるコヴノ、ゴロドノ、ビエロストック、ブレスト・リトフスクまで後退すると世界に告げていた。しかし、ここも持ちこたえられなかった。8月終わりと9月のはじめ、ドイツはこれらの陣地も占領した。わが軍は、すでにブレスト・リトフスクの東にあり、ヴィルナをめざして前進している。

北方で作戦をおこなっていた諸部隊は、最新の情報によれば、デューナ河畔のフリードリヒスシュタットを占領し、こうして川を渡る橋を勝ち取った。これにより、リガはまもなく南西から脅かされるだろう。

リガ湾の前に位置するダゴ［ヒウマー］島は、ドイツの諸部隊に占領された。こうして、湾全体のロシア軍を砲撃するための重要な一歩が踏み出された。ロシア軍がここで、わが軍のさらなる進撃を予期しているということは、次の事実から明らかだ。今やわれわれの前線の250㎞先にある、リーフラント［リヴォニア］の古いドイツ系のドルパート大学の強制移転がもうはじめられているのである。

かなり長いあいだ平穏だった南西ロシア戦線からも、今好ましい新情報が入ってきた。プフランツァー＝バルティン、リノインゲン、ベーム＝エルモッリの諸軍は、イワノフ将軍指揮下のロシア軍を約30㎞押し戻し、多くの捕虜を得ることに成功した。さらにここで、わが軍はルツク、ドゥブノ、ロヴノの三角形を構成する要塞群へ前進しているようであり、これによってイワノフはさらに後退へと追い込まれるだろう。

西部戦線では、砲撃が盛んにおこなわれている他は、比較的平穏であった。敵によってなされた攻撃はいたるところで撃退された。比較的大きな攻撃もなされていない。フランス軍とイギリス軍は、今のところはまだアラス、ヌーヴ・シャペルなどで積み重ねた経験が身にしみているのではな

いかと思われる。

イタリア軍は、オーストリア軍の強力な陣地をさらに攻撃したが、戦果はなく、甚大な損害を受けたのに一歩も前進できなかったそうである。7月の終わりに記事に書いた、コーカサスにおけるトルコ軍の比較的大きな攻撃は、なかったようだ。トルコ軍もロシア軍も戦果をあげたと主張した。おそらくトルコ軍は、バルカン半島の情勢が明らかになるまで、コーカサスに投入が決まっていた新しい部隊を留めおいたのだろう。その間イタリアはトルコに宣戦を布告した。ダーダネルスでは、イギリス軍とフランス軍が得たものは、ずっと鳴り響いている勝利のファンファーレにもかかわらず、敗北と大損害だけなのだが、イタリアの部隊がここで見られるかどうか、あるいはいつ見られるのかは、いずれわかるだろう。

海ではわれわれのUボートが引き続き活動し、よい戦果をあげている。しかも、他の多くの船の他に、例えば「アラビック」のような何隻かの非常に大きなイギリス商船がその餌食になった。アメリカからの情報によると、ドイツは、ここ数カ月間政治的緊張を惹き起こしていたこの潜水艦という兵器の使用に関して、アメリカとの合意に達するという見解があるようだ。

日本の歴史（22）

ロシアの野戦軍は、遼陽付近で防衛の態勢を取っていた。

その前面に、大山元帥指揮下の日本の諸軍が集結した。それらは9月にロシア軍をさまざまな方面から攻撃した。8日間の互いに譲らぬ戦いののちに、ロシア軍の指揮官クロポトキンは、指揮下の諸軍を完全な壊滅から守るには退却しかないと考えた。彼は日本軍に追撃されて、奉天に向かって沙河平原まで後退した。10月の数日間続いた戦いによって、ロシア軍は奉天まで退かざるをえなかった。旅順の占領によって日本の攻囲軍が手空

きになるまで、両軍は奉天で 5 ヶ月間、決定的な戦いを交えないまま対陣していた。旅順陥落後、攻囲軍も奉天前面へと進軍した。5 月 1 日、増強された日本軍はロシアの諸陣地に攻撃を開始した。10 日におよぶ一進一退の激戦で、日本軍が最終的な勝利者となった。

1904 年 10 月、東アジアの艦隊を増強するため、ロシアの大西洋艦隊の大部分が、ロジェストヴェンスキー提督の指揮下に出航した。この艦隊は、単独でも日本艦隊との戦いを引き受けるのに十分なほど強力だった。

旅順港に封鎖されていた諸艦が同時に戦いに参加していたら、おそらくロシア海軍の方が優勢だっただろう。けれども、ロシア艦隊が東にやってくる前に旅順は陥落してしまった。これによって、ロシア艦隊はウラジオストックに向かわざるをえなくなった。この艦隊には、もはやいかなる支援も与えることができなかった。日本艦隊は、ロシア艦隊がウラジオストックに向かう途中で十中八九通過するとにらんだ朝鮮との海峡で敵を待ち受けた。1905 年 5 月 27 日、両艦隊は対馬付近で相まみえた。ロシア艦隊は 38 隻を数え、二列縦陣であった。日本艦隊の主要な攻撃は敵の先頭に向けられ、艦隊の一部は後方を攻撃した。ロシアの諸艦はまもなく混乱に陥った。日本側の優勢な砲撃のため、ロシアの軍艦は次々に沈められていった。夕闇とともに、そのときすでに日本側の有利に決していた戦いは中断され、夜になると日本の水雷艇群が活躍した。翌朝、戦闘は再開された。ロシア側は、ことに重大な損害を受けてすでに数を減らしていたので、もはや攻撃に耐えることができなかった。最終的に 15 隻が残り、そのうちの 7 隻が降伏した。8 隻が逃走に成功したが、そのうち 2 隻がウラジオストックにたどり着いただけで、残りの艦は上海で武装解除された。

度重なる失敗にもかかわらず、ロシアは満州において優勢な戦力でもって新しい軍事行動をおこなうこともできただろう。しかし、今やロシアは戦いを放棄した。国内に広がっていた革命運動がその原因だったかもしれない。合衆国大統領の提案を受けて、ポーツマスで和平交渉が始まり、1905 年 8 月 29 日に最終的な講和が結ばれた。日本は旅順を含む遼東半

島と、樺太の南半分と、朝鮮の支配権を手に入れた。しかし、待望の戦争賠償金を獲得することはできなかった。

つづく

青　島

（『テークリッヒャー・ルントシャウ』の中で、オットー・フォン・ゴットベルクは、非常に具体的に青島戦争の最初の日々について書いている。以下にこの記事を要約してみよう。　　編集部）

敵の手に妨げられることなく、電信は中国からアメリカを経て次のような知らせを運んだ。すなわち、アジアのドイツ人たちが、皇帝の召喚に応じて、大陸のどんなに遠い片隅からも、そして中国、日本、インド、朝鮮からも、青島の勝算なき戦いに武器を取るため歓声をあげて軍旗のもとに馳せ参じたのである。そこでは、太陽[1]にも屈しない鷲の旗が翻った。この鷲のまわりに―召集招されていようがいまいが―アジアのすべてのドイツ人たちが集まろうとした。おそらく若者たちは、戦友や故郷の同年輩の同胞たちと同じように、戦う喜びに誘われてやってきたのだろう。そしてわれわれは、一度も祖国を見たことがないのに祖国に命を捧げようとする外国生まれの人々のことを、感激のまなざしで読んだ。しかし、青島に向かう男たちの流れの最大の部分をなしたのは、豊かな暮らしをし、賢明で、広い世界の商いや事業で経験を積んだ年配の人々だった。その流れは、細くひっそりと、だがたえまなくすみやかに、見張っている敵のあいだをすりぬけて、われわれのアジアの要塞の堡塁の中へと流れ込んでいった。年を経て分別を持った彼らには、旗が長いあいだ翻っていることはできないことを、そして好戦的な国民全体が攻撃すれば、祖国から切り離されてひとり立たされている壁はすぐにも打ち破られることがわかっていた。彼ら

1　日本を暗示

が来たのは、ほんの少しでも可能性のある勝利の楽しい祝宴のためではなく、確実な敗北の暗鬱な日とおそらくやってくる死のためであった。しかし、大切なのは外国におけるドイツの栄誉であり、ドイツの名声であった。それゆえ、彼らは数日のあいだに要塞に入ったのだ。いつもなら青島の居住者でさえ、堡塁と兵士たちに不安げに幸運を祈りながら背を向けるというのに。しかし、青島の城壁のために、われわれの小旗が竿に付けられた。それは栄誉を得られぬうちは降ろされてはならなかった。そのことに心を配り、戦うことが、すべてのドイツ人の神聖な義務となった。こうして彼らは、守備隊の隊伍を組んでやってきた。

中華の国が鼻をゆがめて背を向けたその吹き溜まりのような地は、われわれが 17 年前に青島を得たときには、山東半島の南岸にある不潔な土の小屋からなるみすぼらしい漁村のように思われた。海軍の管理のもと、ドイツの官吏たちの秩序づけ、建設する手と、ドイツの市民たちの勤勉が、千年のがれきの上に、訪れる客の多い海水浴場を持つ好ましい町を、世界貿易の倉庫を、そして東洋の商品をベルリンとハンブルクの貨物駅まで運ぶ新しい線路の終点を、作り出したのである。植樹された広い通り、いくつもの塔、また故国と同じ白いカーテンがかかっている輝く窓のある明るい家々の、赤い屋根を持つ破風は、われわれの同胞たちに祖国の像を示していた。青島の人々は、めったにないほど美しい 7 月が過ぎたのち、豊かな海水浴シーズンを待ち望んだ。これまでの数年よりも早く、いつになく多くの外国人がやってきた。宿屋の主人や店員たちはほくそ笑んだ。上着とズボン、制服や私服を着た若者たちは、ためつすがめつ外国人たちの白い夏服を眺めて、このような光景はこの先も見られるのだろうかと自問した。たしかに時折、戦雲が迫っていることが話題になった。だが、嵐の中心から離れていたために、重苦しい災難の暗鬱な気分はヨーロッパほどは感じられなかった。暗雲はすでに祖国の上に立ちこめていた。なぜよりによってこの年に、火をもたらす稲妻が祖国に落ちることになったのだろうか。

つづく

収容所の情景　　その７

第 18 回コンサート　９月 12 日

プログラム

１．「ドイツ騎士団長連隊行進曲」　ノヴォトニー

２．「古風な様式による５つのアリア」　ガブリエル・マリー

３．オペラ『ホフマン物語』より「間奏曲」と「舟歌」
F．オッフェンバック

４．「美しく青きドナウ」　ヨハン・シュトラウス

５．笑劇『おふざけ男爵』より「小さな娘さん」　W．コロー

懸賞つきスカートとブリッジ

いずれ近いうちに―期日は未定だが―懸賞つきスカートとブリッジ[2]がおこなわれる。このために、それぞれの競技の一等賞には生きた鴨が、二等賞にはケーキが寄付されている。勝利者たちには美味な報償が手招きしているわけだが、そのため参加者はかなり多くなると予想される。参加希望者は、12 月 15 日の水曜日までに申し込むこと。スカートについては予備役副曹長ヴェルナー氏に、ブリッジについては予備役副火工副下士ラーハウス氏まで。

競技規則は各参加者に手渡される。両方の競技に出ることももちろんできる。

チェス・コーナー

（駒の略語　K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン）

第 41 問解答

1. Tg6 x f6　　任意の手
2. D, T, L　いずれでも詰み

第 42 問解答

1. Sf7 - e5　　Db8 x d6 +
2. Kg6 - h5　　任意の手
3. D, S 詰み

第 42 問その他の解答

1. . . . .　　Kf4 x e5	1. . . . . .　　Db8 x b5
2. Dg1 - e3　Ke5 x d6	2. Dg1 - f2 +　　Kf4 x e5
3. De3 - e7　詰み	3. Df2 - f6 詰み

正解者：　第 41 問、ヨーゼフ・ヴェーバー、ローデ
　　第 42 問：ヨーゼフ・ヴェーバー

2　ともにトランプゲーム。

第 43 問　白：Kg6, Df4, Tc8, Sa5, b4, Bd6, f2
黒：Kd4, Sa4, c5, Be4, f6, g7
2 手詰め

第 44 問　白：Kf8, Sg7, Td6, h2, Lh5, Bb2, e4
黒：Kc5, Tc4, Sa6, d3, Bb3, b4, b5, e6, f7.
3 手詰め

「エムデン」上陸隊体験記（10）

あるとき、浚渫船の船長が開口一番叫んだ。「ありがたい。拿捕されたぞ。」彼は、オーストラリアまでの運賃と経費をたんまりもらっていたが、このとき残り半分の航路分を得したわけだ。

9 月の天気はだいたい穏やかだったので、拿捕した船との行き来は容易だった。その後、それらの船は爆薬で破壊するか、喫水線を狙った砲撃によって沈めた。沈んでゆく時間の長さは命中弾と積荷次第だった。たいてい船は転覆し、最後には水が煙突に入って煙が上がり、それから沈んでいった。船首が没して斜めになり、船尾を上げて沈んだ船もある。そのあとボートや積荷、ありとあらゆる奇妙なものや哀れを誘うものが浮かび上がってきた。「カビンガ」には、船長が妻と息子を連れて乗っていた。彼は最初打ち解けず、「やつらはわれわれをどうするつもりだ。ボートで海に降ろされるのだろうか」と思った。すべての船長と同様、彼も心を許し、われわれのことを「オールドシェップ」と呼び、少尉に新しいきれいなオイルスキンのコートをくれた。われわれが「カビンガ」を解放したとき、彼は礼状を書いた。彼の妻は、軍帽のリボンとボタンを懇願して手に入れた。彼らは、われわれが離れるときに三度万歳を叫んだ。「いつかカルカッタに来なさい」と船長は最後に言った。「水先案内人どもをつかまえてやりたまえ。恥知らずのならず者に戦争のことを実感させてやるために。」カルカッ

タ付近でわれわれは数日後、最大の獲物のひとつを沈めた。「ディプロマート」で、たっぷり 1 千万の値打ちはあっただろう。同じ日、まっすぐこちらの方に向かってきた「トラボッチ」も沈めた。しかし、このときわれわれはベンガル湾から抜け出るつもりだった。というのも新聞から、「エムデン」がすでにきびしい捜索を受けていることを知っていたからである。ラングーンの近くで、われわれは一隻のノルウェー船と出会ったが、現金を支払うと、この船は捕虜の残りをわれわれから引き取った。のちに別の中立船は同じ要請を断り、むしろわれわれを日本人に売ろうとした。9 月 23 日、われわれはマドラスに到達し、そのまま港に向かって行った。町まで 3,000 メートルのところで向きを変え、停船した。すべて平和なときと同じである。それからわれわれは石油タンクを砲撃した。三つ、四つと炎が高く上がり、町を照らし出した。敵の反撃もあった。めくらめっぽうにではあるが、数回の砲撃が間違いなく認められた。イギリスの新聞は、攻撃が石油タンクにのみ向けられたことを半ば自発的に強調している。おまけに、マドラスは武装都市なのだ。いくつかの新聞は、われわれが離脱するときに明かりを消していたと主張した。そうではない。われわれは北に向かうと見せかけるために、左舷の覆いを取って燈火をさらしたのだ。しばらくしてから灯を消し、反転して南に向かった。同じ晩に町の指導者たちは、海が「エムデン」から解放されたお祝いの晩餐をやっていた。政庁は、「エムデン」がいなくなったと請け合っていたのである。マドラスを後にしたとき、われわれは夜闇の中に火災の光を見た。明るくなってからも、90 海里以上離れたところから火と煙がみとめられた。しかし、突堤の灯台はなおも楽しげに光を発していた。それは減光されていなかったのだ。それから二日間でセイロンをまわり、コロンボの灯火を見ることができた。われわれはその晩、さらに二隻の汽船、「キング・ランド」と「タイレリック」をつかまえた。特に後者はありがたかった。われわれにコロンボの最新の夕刊を提供してくれたのだ。というのも、この船はたった 2 時間前に出港してきたばかりだったからである。

つづく

シュピーゲル（鏡）

「トクシマ・アンツァイガー」24 号ユーモア付録
1915 年 9 月 12 日

ちびのフリッツが思い描く、次回スポーツ大会の
「年配者チームの出場」の様子。

郵便が届いたぞ

故郷からの郵便が届いたぞ！
その知らせを聞くやいなや
老いも若きもすぐに押し寄せ
みんなが一番になろうとする。
自分に手紙が来ているという
希望を誰もがいだくので。
事務所から重い荷がくる。
二人の兵隊が運びかねている。
フィトゲが言う。カール、賭けてもいい、
あれはうちのイェッテの葉書だ。
フリッツは、もう遠くから
息子宛の母の手紙をみつける。
ベルリンっ子も希望にあふれて
おれにも何か来てる、と言う。

軍事郵便小包の気がする。

女の子からまた届いたんだ。

ここでやっと、ああうれしや

手紙の配布がはじまる。

レーマン、シュルツェ、マイアー、シュミット、

彼らがもらえるのは毎度手紙 6 通と

4 通のはがきと郵便料ただで

それぞれ約 20 の新聞と何かだ。

ここと同じようにあちらでも

もう宿舎に持ち帰って大騒ぎだ。

戦場の兵士がそれぞれ一度に

こんなにたくさん

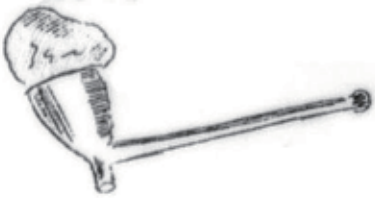
もらったら、

ここでも祖国でもすぐに、

郵便屋が足りなくなる

だろう。

カールとフィトゲもご満悦で

手紙を持って立ち去った。

ひとりベルリンっ子は
ぶつぶつ言う。
「あの娘はおれを
かつぐつもりか」
チョコレートの詰
まった軍事小包は
まるで黒い靴ずみ
みたいだ。
フリッツは石鹸の泡
に包まれたように
この上なく麗しい未来
の夢を見る。
何ももらえない者らは別だ。
現実はこんなにも
きびしいとは。
けれどもみんなが
慰めてくれる。
次は君たちの番が
来るよ、と。